

境界の島からみた中世日朝交流史

荒木 和憲

1978年生まれ。九州大学文学部卒、同大学院人文科学府博士後期課程修了。博士(文学)。九州大学大学院人文科学研究院准教授。専門は日本中世史・東アジア交流史。

研究の原点

今でこそ歴史総合の科目が設けられているが、私が高校生だった1990年代は、当然ながら、日本史と世界史は別個のものとして学習していた。もともと日本史に興味があり、世界史は受験対策として勉強した、というのが実情なのだが、2科目を学ぶなかで感じたのは、同じ歴史の科目でありながら、世界のなかに日本が存在するにもかかわらず、両者の関係がつかみづらいということである。当時は高校の地歴科教員をめざしており、大学で歴史学を専攻するのは既定路線だったのだが、気づけば、日本史をベースとして世界史とのつながりを探究したいと考えるようになっていた。

九州大学文学部の日本史学研究室は、伝統的に国際交流史研究を強みとしてきた。そうと知ったうえで進学したわけではないが(当時は大学の情報を簡単に入手できなかった)、結果的には受験勉強中の思索とリンクすることになった。朝鮮史学研究室があるのも特色で、『朝鮮王朝実録』(朝鮮時代の歴代国王の年代記)を講読する演習に参加できたことが大きな糧となっ

ている。

研究の出発点

もともと日本史のなかでも古代史と中世史に興味があり、どちらの講義・演習も欠かさずに受講していたが、国際交流の多様性という点では中世史の方に魅力を感じた。当初は中国・琉球との交流史に興味をいただいたが、卒業論文のテーマを決定するにあたり、朝鮮との交流史を選択した。2001年の春のことである。指導教員の佐伯弘次先生に勧められるがまま、日本列島と朝鮮半島との境界の島である対馬を軸として、日朝交流史を研究することにした。この頃は日韓融和のムードがただよっていた(日韓ワールドカップが開催されたのは翌年のこと)。そうした時代の風潮にも後押しされ、中世日朝交流史を研究してみる気になったわけである。

対馬の中世史料は、古文書(手紙や証明書など)だけで優に6,000点をこえるボリュームを誇る。従来の中世日朝交流史研究は、質量ともに豊富な『朝鮮王朝実録』を軸に研究が進められてきたため、「これを対馬の中世史料と突き合わせれば、何かできるのではないか」という、きわめてテクニカルな発想が研究の出発点をなしている。「研究史の的確な整理と批判からテーマを導き出したのだ」と胸を張って言えればよいのだが、色々な偶然が重なり、テーマにめぐ

りあったというのが率直なところである。

卒業論文のこと

「中世日朝交流の最前線は対馬である」ということに異論の余地はないだろう。しかし、「対馬が朝鮮と貿易した」という類の記述を研究書や論文などでみかけることがある。その場合の「対馬」は何を指し、「朝鮮」は何を指すのか、具体的な人間の営みがみえてこないことに違和感をいただいていた。そこで、「対馬」の内実を探るべく、中世史料の読解(未翻刻のものが多い)とそのデータベース化(当時は手書きのカードから電子データへの移行期だった)に着手し、対馬一島の領主である宗氏がどのように島内を支配していたのかを解明することをめざした。

卒業論文では、15世紀前半における宗貞茂・宗貞盛父子の島内外での政治的動向を解明しつつ、それが朝鮮との通交(外交・貿易)とどう関係するのかを考察した。この時期は、19世紀後半まで持続する日朝交流の基本的な枠組みが形成された時期であり、日本史探究の教科書でも必ず記述がある。今振り返れば、貞茂・貞盛の時期に着目したことで、14世紀以前の高麗との交流史や、15世紀後半以降の朝鮮との交流史を架橋し、通時的に朝鮮半島との交流史をとらえるための土台をつくることができたように思う。

博士課程で壁にぶつかる

修士課程に進学し、在籍中に宗貞茂・宗貞盛に関する論文を1編ずつ投稿した。また、15世紀後半に顕著な活動がみられる「特送船」に着目し、その使節には宗氏の島内支配を担う家臣たち(要は役人)が選任されていた事実を突きとめ、島内の政治と外交が密接にリンクしていたことを示した。これも論文として投稿することができた。

以上の成果を修士論文にまとめ、博士課程に進学したが、そこで壁にぶちあたった。それまでは日朝間の「史料の海」を泳ぐだけで精一杯で、

研究史との格闘を後回しにしてきた側面は否めない。いざ博士論文をめざそうとしたとき、進むべき方向性を見失ってしまったのである。

中世日本対外関係史研究の動向

中世日本対外関係史(ないし東アジア交流史)の研究は、1980年代から活況を呈するようになった。西欧諸国でECの結成に象徴される国家統合が進むなか、日本の歴史学界では、国家を相対化するための「地域」論が議論された。日本中世史の分野では、村井章介氏の「環シナ海地域」論(『アジアのなかの中世日本』校倉書房、1988年)が今なお重要な位置を占めている。

そうした研究潮流とともに、中世日朝交流史研究が進展してきた経緯がある。日朝関係は、朝鮮国王が日本国王(室町幕府将軍)との関係を構築するだけでなく、幕府重臣(足利一門の有力守護)、九州探題、西日本の守護・国人、さらには倭寇の頭目や一介の商人とも関係を構築するという多面的なものであった。朝鮮は西日本の武士たちに倭寇の取締りを期待し、かつ倭寇の集団そのものを懐柔して解体しようとしたのである。これは中華皇帝が日本国王にのみ朝貢を認め、その機会に貿易を許可するという一元的な日明関係とは異なる。つまり、国家を相対化する「地域」研究を実践するうえで、中世日朝交流史はとても好都合な研究対象だったわけである。そして、2000年代にかけてテーマが多様化し、西日本各地の通交者に関する個別研究が蓄積された。この結果、中世日朝交流史像の解像度は格段に高まったが、研究の細分化という副作用をともなった。

こうした研究動向を明確に意識して研究に取り組むようになったのが、私の研究の転機である。「対馬が重要なのは自明であり、君の研究に新規性はない」とのご批判は散々頂戴していたが、多様な地域を対象とした研究が活況を呈するなかで、「自明」でなくなった「対馬の重要性」を問い直すことに意義を見出したのである。

偽使研究の進展

中世日朝交流史研究の精緻化(細分化)が進むにつれ、朝鮮史料に現れる西日本各地の通交者たちの多くが「虚像」であることが明らかになっていった。たとえば、物故者がいつまでも通交を継続するとか、架空の人物が通交するというように、何者かが第三者の名義を利用して「偽使」(偽りの使節)を派遣する実態がみえてきたのである。その「何者か」に相当するのが宗氏であるとの新説も提起された(長節子『中世 国境海域の倭と朝鮮』(吉川弘文館、2002年)など)。16世紀後半に宗氏が数多くの偽使を運用して貿易を維持・拡大していたことは、早くから知られていたのだが(田中健夫『中世海外交渉史の研究』(東京大学出版会、1959年))、そうした実態が15世紀後半にまでさかのぼることが判明しつつあったのである。

西日本各地の通交者の「虚像」化が進行するのに反比例するかたちで、宗氏が彼らの名義を利用した通交を拡大したことは、「対馬の重要性」を問い直すことにつながる。そこで着目したのは、宗氏が家臣に対して貿易権を知行(権益)として分配していたという事実である。山がちで農業資源に乏しい対馬では、土地(所領)よりも商業・貿易の権益に比重をおいた知行制が展開していた(近世松前藩の場所請負制を想起されるとよいだろう)。それゆえ、宗氏の知行制、すなわち「家臣団統制の問題が日朝交流に影を落としているのではないか」という仮説を立てることができた。宗氏の対馬支配について、「島内支配」という程度のゆるやかなとらえ方をしていたのだが、これを「領国支配」に置き換えることで、「宗氏領国」と朝鮮との関係を追究するという、新たな方向性が定まったわけである。

宗氏領国の偽使運用

新たな方向へ進むための足がかりになったのが、「歳遣船」制度(通交者ごとに1年間の貿易

回数を定める制度)の問い直しである。1443年の癸亥約条で宗氏の歳遣船は50船(回)と規定されたわけであるが、他氏がおおむね1~2船であることから、宗氏が「年間50回も貿易ができる」特権を得たものと解釈されてきた。しかし、私は「年間50回しか貿易できないようにする」規定であるとの異なる解釈を提示したのである。

癸亥約条の締結以前から、宗氏が発行する外交文書(書契)やパスポート(文引)を所持しなければ貿易できない仕組みが構築されていたのだが、貿易の回数が制限されることはなかった。宗氏としては、地侍層の経済的要求をくみあげ、みずからの統制下で朝鮮貿易に従事させることが求心力の維持・強化につながる。それゆえ、貿易回数が無制限であることは、家臣団を形成し統制するのに、きわめて都合がよかったわけである。ところが、歳遣船という名のシーリングがかけられたことで、家臣団統制が行き詰まることになった。

この状態を解消するため、宗氏はまず歳遣船数の増加を交渉したが、朝鮮側は頑として応じなかったため、第三者の名義を利用した偽使の運用に着手した。しかも、朝鮮が歳遣船制度の適用範囲を拡大したことが、偽使の運用に利用される名義の増加をまねいた。すなわち、偽使aを運用するだけでは年間1~2回しか貿易できないので、偽使b、偽使c……というように、際限なく名義を増やす方向に作用したのである。こうした宗氏のトリックとジレンマに気づけたことで、博士論文への道筋がみえてきた。

博士論文のこと

博士論文をめざすうえで、つぎの問題となったのが、1510年の「三浦の乱」の影響である。

朝鮮は1420年代に日本人向けの開港地として三浦(齊浦・釜山浦・塩浦)を指定し、1430年代には居留も認めた。15世紀後半には日朝貿易の活況を背景として、総人口は約3,000人に達し、その多くは対馬島人であったとみられる。通説

的には、三浦居留民の不満が爆発した事件と説明されるが、裏で糸を引いていたのは、ほかならぬ宗氏である。貿易の活況は銅の輸出拡大に負うところが大きかったのだが、朝鮮側が銅の公貿易(官庁が主体となる貿易)を制限したことに宗氏は強い不満を抱いていた。いわば貿易摩擦である。その状況を打破するため、宗氏は三浦居留民を扇動して朝鮮側に脅威を示し、妥協策を引き出そうとしたのである。

ところが、朝鮮側は強硬姿勢をつらぬいたため、講和交渉の結果、1512年に締結された壬申約条は、宗氏にとってきわめてきびしい内容となった。三浦居留が禁止されたのはもちろん、乱の当事者である宗氏の歳遣船は半減(25船)となり、西日本各地の通交者の歳遣船(実態は宗氏が運用する貿易船)も一斉に停止された。それまで宗氏は偽使を運用することで、歳遣船の総数を150船程度の水準で維持していたのだが、それが一時的に25船にまで激減したわけである。

このことは知行制の崩壊に直結し、宗氏一門と家臣団の分裂をまねいた。16世紀前半には宗氏当主がクーデターで失脚する事件が2度も発生している。宗氏当主が一門と家臣団を再統合するためには、歳遣船数を回復し、知行制を再建しなければならなかった。しかし、宗氏名義の歳遣船数の回復が難しい以上、他氏名義の歳遣船数の回復、すなわち偽使の復活・拡大という手法に頼らざるをえない。この結果、16世紀後半には歳遣船数が100船をこえる水準にまで回復し、宗氏領国は再び安定化したのである。

以上のように、宗氏領国の政治過程と日朝関係とが密接不可分に連動していることを博士論文にまとめ、2007年に公開することができた(『中世対馬宗氏領国と朝鮮』(山川出版社))。

なお、日本史探究の教科書の多くは、「三浦の乱を契機として日朝貿易は衰退した」とする通説に依拠して記述する。唯一、東京書籍版(2024年発行)が偽使の問題に踏み込み、「1510年に朝鮮の貿易制限に反発して倭人がおこした

三浦の乱後は、これらの偽使が貿易量の補填に貢献した」と記述する(執筆者の橋本雄氏は当該分野の専門家である)。

その後の展開

著書の公刊後、博物館・文化財行政の研究職につき、私自身の発想にもとづく研究が停滞した時期もある。しかし、それまでの文字資料一辺倒の研究から脱皮し、多様なモノ資料に向き合う姿勢を涵養することができた。2010年代以降は、中世日朝交流で往来したモノ(木綿・経典・陶磁器・塩)への関心が高まり、物流を支えるインフラとしての船に関する研究も進んでいる。また、対馬に視点をすえつつ、14世紀以前の高麗との交流、16世紀末の「壬辰戦争」(文禄・慶長の役/壬辰・丁酉倭乱)、17世紀前半の近世日朝交流にも研究対象を拡げている。

振り返ってみると、2000年頃の日韓融和ムードを背景として、中世日朝交流史研究を志したわけだが、皮肉なことに、倭寇・偽使・戦争という負のキーワードがつきまとう研究にたどり着いてしまった。「これが日韓の相互理解に資するのだろうか」と自問自答することもある。しかし、過去の事実の負の側面を直視することでみえてくるものもあるはずである。中近世日朝交流史(より包括的には前近代東アジア交流史)を研究することの学術的意義はもちろん、社会的・国際的意義をより真摯な姿勢で問い続けていきたい。

最後になるが、近年の中世日朝交流史研究は停滞気味である。若手研究者・大学院生たちの対外交流史全般への関心が薄いようにも感じる。「シニア・中堅層が頑張りすぎたせいで、落ち穂すら拾えないからだ」という話も耳にするが、まだまだ種が尽きてはいないはずである。

(あらき・かずのり/九州大学大学院人文科学研究院准教授)

研究分野の入門書

関周一編『日朝関係史』(吉川弘文館、2017年)

荒木和憲『対馬宗氏の中世史』(吉川弘文館、2017年)

